

閉会の挨拶

田 中 毎 実（京都大学高等教育研究開発推進センター センター長）

報告者の方々、司会の方々、どうもありがとうございました。会場の方々も長い間おつきあいいただきまして、どうもありがとうございます。

今日の議論は単位制度ということで、原理論から具体的な事例に至るまでさまざまな刺激を与えていただきました。一つだけ仲間内のことなのですが、森本さんのことに少し触れておきます。森本さんの話は、いつも聞いていてまるで吉本興業だなと思うのですが、とにかくあれだけ自分自身を笑い飛ばすというのは大したことで、よほど強い力がないと、あのように自分を笑い飛ばすことなどできないですね。その前提には、当然のことながら、相応の自信もあるわけです。先ほどご自分の授業の話をされていましたが、実際に見ると本当にすごい授業です。だから、ああいうおもしろい話しの背後にはこういう強さがある。このことはお聞きになっておられて十分にお分かりかとも思いますが、あえて一言、僕の方からも言っておきたいと思います。

実は今日お話を聞いていて思っていたことがあります。地震以来、物を読んだり書いたりしているときに、いつも頭の隅っこに、例の津波の映像や津波の後の廃墟の映像、原子炉が壊れて煙が上がっている映像がある。気を許すと、読んでいる途中にふっとあの映像が出てきて、「だからどうやねん」と問いかけるわけですね。つまり、読んでいることの意味、書いていることの意味を根源的に問われるという感じがします。つまらない饒舌、つまらない余分なものが全部そぎ落とされて、直裁に意味が問われるという感じがするのです。今日もお話を聞いていて、そういう感じが僕はとてもしました。こういう話を聞いていて一体何が残るのだろうか。余分なことはたくさんありますけれども、結局、僕の受けた印象は、学生が学ぶということをどう受け止めているのかが問われていたようです。この学生の学びの受け止め方は、実は自分が学びをどうやっているのかということと不可分でありまして、今日のお話からそういうあたりの学びということについて随分考えさせられました。

これも仲間内だからつまらない例を挙げますけれども、溝上さんが例のタイプ3ということを挙げるたびにいつも思うのですが、「よく遊んで、よく学ぶ」と、そんなにしゃちほこばって言わなくてもいいのではないかと僕は思います。肩肘張らずに、もっと肩の力を抜いたらいいのではないかと思います。それは溝上さんの勉強の仕方や研究の仕方についても当たるわけでありまして、学び方などは、そんな形で人のことを言うときに、同時に自分のことを言っているという感じがあります。今日もこういう単位制度という形で学生の学びとは何なのだということを問いかけているときには、実際に問いかけている人、答えようとする人の学びが露骨に露出して表れてくるという感じがあります。これはとても面白いことだと思っています。

そういうことも含めて、「結局、ここでは、学びということを問題にしたのだな」ということを、ぶつぶつ思いながら考えていたのです。普通こういう形で頭の中がかなりカーッとなってくると、後で懇親会をやってクールダウンすることができるわけですが、今日はそれができないわけですね。皆さんも多分僕がやったのとは違ったような、かっかとした部分があると思うのですけれども、これをクールダウンせずにホットなまま帰るといっても時勢柄いいのかもしれないと思います。これを持って帰られて、ぜひ明日ももう一回来られて、またぶつぶつ言いながら帰っていただいたら、この会の意義があるかと思います（拍手）。

（大塚） 田中先生、どうもありがとうございました。

それでは、以上でシンポジウムのセッションを終わりといたします。明日は、個人研究発表が朝の9時から開始となります。

皆さんのお手元にフォーラムのアンケートがあります。明日のプログラムに関しても記されておりますが、これは予定を書いていただくということで、今日の時点で何かお気づきの点がありましたら、その範囲でアンケートに記載していただければと思います。係の者がボックスを持って待機しておりますので、そこに入れていただければと思います。

今日お帰りの方がいましたら、名札は回収ボックスがあると思いますのでその中に入れていただくか、あるいは係の者に預けていただいても構いません。特に関東より北、あるいは関東に帰られる方は、足元にどうぞお気を付けてお帰りください。どうもありがとうございました。